

「棋訣四篇」に学ぶマネジメントの極意

第2回：棋訣第二篇・侵凌

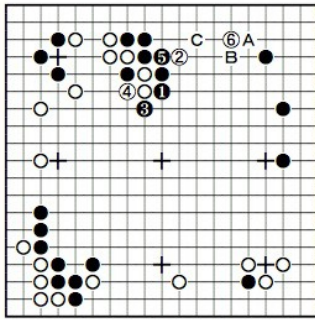
国論を二分する所謂“税と社会保障の一体改革案”が衆議院での採決の後、参議院での審議が続いているが、そこに今回のテーマ「侵凌」から野田政権が学ぶべき何かが見える。何事においても攻める際には鉄則がある。先ず自陣(党)内の組織体制(結束力)を盤石なものにした上で外に向かうことである。野田政権はこの基本を軽視したかの如く攻め急いでおり、脆さの本質がある。未だに自陣内に獅子身中の虫を抱え、党組織が瓦解し始めているにも関わらず、前のめりでことを進めようとしている姿は見るに堪えない。残念ながら野田総理は囲碁を知らない(柔道は二段らしい)。他方、自陣に反旗を翻し飛び出した小沢氏は、アマ6段で政界最強と言われる人。棋理にも通じているはずなのに、偏心があるように映るが？ 政治家各位、どうか棋訣に学び日本を正しい方向にお導きあらむことを心から！心から！心から！願う。

「侵凌」とは侵略の意で、序盤の布石(布置＝骨格)が完成して中盤の戦いに突入し、いよいよ佳境に入った段階で仕掛ける作戦。互いに最善手で応対する限り形勢は拮抗しているはず。手筋の応酬で形勢の逆転また逆転が起こり得る白熱した戦いとなる。下手をするとどちらかが潰れるリスクも大である。小生自身の対局でしばしばやってしまう勝手読み、場違いの定石(中国の諺に“水は舟を浮かべること沈めることもできる”とあるように、定石は適宜・適切に使って始めて生きる)、手筋抵牾(もどき)の着手などなどで自滅することが多い局面でもある。

さて、布石の段階では感性(右脳)が試されるのに対し、侵略・侵攻のステージに入り終盤まで、主として左脳の論理回路(読む力)が機能するとされる。であるが故に、囲碁が年寄りのボケ防止や幼少期の脳の発達に有効と言うのは脳科学者の間でも定説となっている。

棋訣第二篇・侵凌に曰く、“……常に臨機応変に考え、始めから決めて掛るものではない……互角の形勢から侵略行動が始まる……自陣の勢力を利用して斜めに石を連ね(桂馬飛びで)侵攻を図る……敵の対応をよく見てその心を読み取ること……”と。自らの石がしっかりし、読みを正しく行えば相手に対し強気の陣形を以って攻めることで好機を探れると言う。逆も真なり。つまり、自陣の弱みは相手の格好の標的となるし、相手の一連の応手を通じて対局相手の心理状態を感じ取ることができればさらに勝機が増大すると言う意味。

史上最強の棋士と尊称される本因坊・道策(1645年～1702年、島根・石見の出身)の侵凌の極意に触れて見たい。仏門にあった彼は調和を重視した合理的な打ち手として知られるが、大変有名な生涯の一局は1683年に第5代将軍・徳川綱吉の御城碁で打たれた。安井春知との二子局で見せた侵凌の手本とも言うべき局面(下図1参照)における打ち回しが印象的。“布石の骨格が決まり、中盤に差し掛かって黒38手目に黒1と押したところ。白は当然と思える3でなく、上辺白2へ向かった。黒3と打たせても上辺2、6と侵入する方が大きいと見たところに柔軟性を見る。その後黒も黒A、白B、黒Cと攻め立てるが、白は手順を尽くして侵凌(サバキ)に成功した”と解説されている。

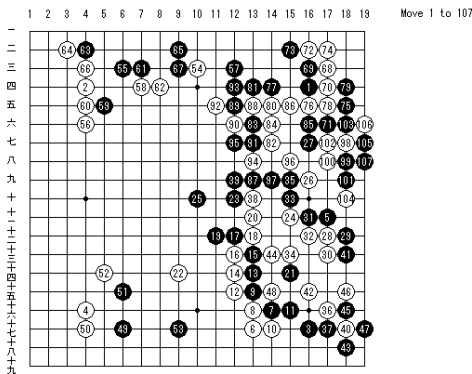


他方、“究極の攻め”で印象に残る棋士に故・加藤正夫氏がいる。名人2期、本因坊4期、王座11期など数々のタイトルを獲得も惜しまれつつ早逝した天才である。若い頃の加藤は“殺し屋”の異称を持つように、強烈な「侵凌」を得意とする稀有の棋士でもあった。下図(2)の結城聡との天元戦はまさにその典型とも言える傑作である。布石もほどほどにいきなり急戦に持ち込み中押し勝ちを決めている。

第31期天元戦1回戦第1局 2004.12.02

結城聡 × 加藤正夫

結果：加藤正夫(黒)の中押し勝ち



情報源：神戸新聞

加藤九段のご冥福をお祈りいたします

さて、孫子兵法における侵凌の姿として、軍争篇・風林火山の中で、“侵掠(しんりやく)すること火の如く”、即ち、燎原の火のように自らの勢いを以って相手の弱点を衝き、怒濤のごとく一気に進めるべきと主張する。但し、その際”地の利“を味方することを忘れるなども説く。また、兵勢篇においても、“石をもって卵に投ずるがごとくなるは、虚実これなり(石で卵を砕くように敵を撃破するためには、充実した戦力で敵の手薄を衝く戦法をとるのが良い)”と、自陣の足場を固めた上で敵陣の薄みを衝けと教える。

企業経営における侵凌は、競合相手のマーケットを奪い取ることだが、その手段として商品力、技術力で差別化を図るか、コスト競争力で戦うか、又は企業や事業の買収・合併によって市場を買うと言う策を以って侵攻することである。これらの策を用いる場合、前提条件として自社内部の環境(経営資源、組織風土、中核能力)が侵凌をこなし得る状況にあることが必須である。外に打って出る勢いを効果的にするためには、充実した人材と自社の強みを以ってライバル企業の弱みや意表を突く方法を取るのが良策。

“攻めの経営”の成功事例としてよく引用される企業に富士フィルムがある。ドル箱であったレンズ付きフィルム「写ルンです」やアナログ写真フィルム事業が、競合他社の新技術(デジタル化)に押されてじり貧となり経営難に追い込まれた。そこで、10年掛けて2度に亘る大構造改革を断行し、成長への布石を打ったことで捲土重来を果たした。即ち、研究開発力、生産拠点拡大などに加えて、M&Aによる“攻めの経営”を敢行した結果、フィルム事業で培った技術集積の応用などによって時代の新しい波にも乗り、新規事業の立ち上げにも成功した。重要なことは、時の経営陣が外部環境を冷静・適確に読み、時宜を失することなく、足場固めと攻めの経営を並行して実行したことであろう。棋訣・第二篇の侵凌の極意がビジネスの場でフルに活用された事例である。

このように囲碁の極意が、戦や企業間競争にも脈々と活用され成功に導いてきたことは確かな事実である。また、人生経営においても、所謂ベンチャー企業を立ち上げ、今や世界の大富豪の地位を得たマイクロソフトの創業者ビル・ゲーツを始めとする多くの経営者にも、優れた「侵凌」の精神を見ることができる。

<以上>

足立敏夫

「囲碁と経営」研究家

(囲碁梁山泊連載:4回シリーズ:次回は棋訣第三篇・用戦)